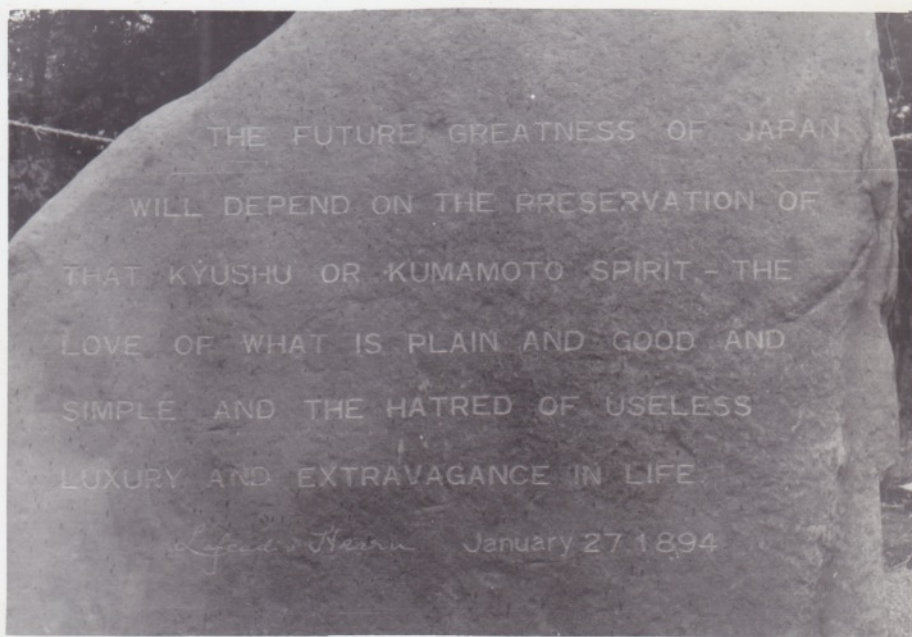




小泉

昭和

IIW
AHT
VOJ
MIS
UJ



小泉八雲記念碑・旧居

所在地 熊本県熊本市安政町二六 鶴屋ズト裏 八雲公園内

小泉八雲

の

レリーフ

裏面

昭和三八・二九・六三年一月建之

小泉八雲熊本旧居保存会



小泉八雲記念碑・旧居

所在地 熊本県熊本市安政町 2-6 鶴屋デパート裏 八雲公園内

小泉八雲

の

レリーフ

裏面

昭和三十八(一九六三)年一月建之

小泉八雲熊本旧居保存会



小出浩平曲碑

所在地 東京都文京区本駒込三十九 吉祥寺境内 経蔵の前

小出浩平
の
レリーフ

小出浩平先生顕彰歌碑

こ い の ぼ り
作詩作曲 小出浩平
五 線 譜

碑陰

小出浩平先生畧歴

明治三十年八月十四日新潟県南魚沼郡塩沢町仙石に生まれ舞子小学校高田師範学校を経て大正十四年東京音楽学校卒業
一 南・西海小学校・香川師範学校・東京赤坂小学校・同校東小分校歴任・昭和二年学習院教授に就任・皇太子殿下・義宮殿下の音楽御教授育係拝命・昭和元年三宅戸学院理事・東邦音楽大学副学長の要職につき 日本教育音楽協会を始め多数の会の会長として活躍
二 この間に日本で最初の学年別基礎指導・リトによる鑑賞指導・器楽指導・創作指導を音楽教育に取入れ我が国音楽教育を一変させた
また唱歌新教授法・合唱曲集・教育音楽等の多数の著書や雑誌の編集・このほかに等曲の愛唱歌九百余の校歌の作曲・NR・IRS・その他多数のミュージックの創始・審査・また放送講演等により日本の音楽教育を今日あらしめた功績は絶大である
よつて茲に歌碑を建立し顕彰する次第である
昭和五年十一月六日

小出浩平先生顕彰碑建立実行委員会
今成青繼書

略歴

小出浩平 明治三十年八月十四日 新潟県南魚沼郡塩沢町仙石に生まれる 東京音楽学校甲師卒業 昭和六年三月十七日歿す 享年八六歳



小出浩平曲碑

所在地 東京都文京区本駒込 3-19 吉祥寺境内 経蔵の前

小出浩平
の
レリーフ

小出浩平先生顕彰歌碑 (横書き)

こいのぼり

作詩作曲 小出浩平

五 線 譜

碑陰(縦書き) 小出浩平先生略歴

明治三十年八月十四日新潟県南魚沼郡塩沢町仙石に生まれ舞子小学校高田師範学校を経て大正十四年東京音楽学校卒業

- 一、南西海小学校・香川師範学校・東京赤坂小学校・同城東小学校歴任・昭和十二年学習院教授に就任・皇太子殿下・義宮殿下の音楽御教育係拝命・昭和廿九年三室戸学院理事・東邦音楽大学副学長の要職につき 日本教育音楽協会を始め多数の会の会長として活躍。
- 二、この間に日本で最初の学年別基礎指導・レコードによる鑑賞指導・器学指導・創作指導を音楽教育に取り入れ我が国音楽教育を一変させたまた唱歌新教授法・合唱曲集・教育音楽等の多数の著書や雑誌の編集・こいのぼり・おしし等の愛唱歌九百余の校歌の作曲・NHK・TBS・その他多数のコンクールの創始・審査・さらに放送講演等により日本の音楽教育を今日あらしめた功績は絶大である、よって茲に歌碑を建立し顕彰する次第である。

昭和五十四年十一月十八日

小出浩平先生顕彰碑建立実行委員会

今成青巒書

(略歴追加 昭和 61 年 3 月 17 日歿す 享年 88 歳)



幸田露伴句碑

所在地 北海道余市郡余市町浜中町三 遡中央水産試験場前

露伴

碑陰

文字なし

塩 鮭 の

あ き と

風 ふ く

寒 そ

か な

略歴

幸田露伴 本名 成行 (じやうき) 号 蝸牛庵 慶応三年七月二十三日 江戸下谷三枚橋横町 俗称新屋敷に生まれる 電信修技学校卒業 昭和二十三年七月三日歿す 享年八十歳 墓は東京都大田区池上一一 池上本門寺墓地にある



幸田露伴句碑

所在地 北海道余市郡余市町浜中町 238 道立中央水産試験場前

露伴

(鮭)
塩 鮭 の

あ き と

風 ふ く

寒 さ

か な

碑陰

文字なし

略歴

幸田露伴 本名 成行(しげゆき) 慶応3年7月23日 江戸下谷三枚橋横町
俗称 新屋敷に生まれる 電信修技学校を卒業 昭和22年7月30日歿す
享年80歳 墓は東京都大田区池上1-1-1 池上本願寺墓地にある



幸田露伴文学碑

所在地 山形県酒田市南新町 日和山公園内

峠を雨に越えて 湯の田に
一杯を傾け 吹浦より藤崎を経て
酒田に入りぬ 電
吹浦より酒田に至る
六里ばかりが間は
いづれも皆海風荒く 砂舞ひて
人の行き悩むところなりしが
佐藤藤蔵 服部外右エ門 曾根原六蔵
本間宗善 (註差) 堀善蔵等の
人々の松を植え林を造りしが
ために 今の如くなるに
至れりといふ
十九日
酒田を立ちて最上川を渡る
茫々たる蘆荻人をも車をも
埋めんとす

幸田露伴「選行記」より

碑陰

文字なし

(注) 昭和五十九年秋建立



幸田露伴文学碑

所在地 山形県酒田市南新町 1-7-16 日和山公園内

峠を雨に越えて 湯の田に
一杯を傾け 吹浦より藤崎を経て
酒田に入りぬ (中略
吹浦より酒田に至る
六里ばかりが間は
いづれも皆海風荒く 砂舞ひて
人の行き悩むところなりしが
佐藤藤蔵 服部外右エ門 曾根原六蔵
本間宗善 (註光丘) 堀善蔵等の
人々の松を植え林を造りしが
ために 今の如くなるに
至れりといふ
十九日
酒田を立ちて最上川を渡る
茫々たる蘆荻人をも車をも
埋めんとす

幸田露伴「遊行雑記」より

碑陰

文字なし

(注)昭和五十九年秋建立



田 幸

風石河

雨き晴

き晴一

酒田酒

も酒大

大里六

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒

酒田酒



日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学

日本文学







幸田露伴旧居址記念碑

所在地 東京都墨田区東向島一丁目 露伴児童遊園内

露伴児童遊園のこと

ここは文豪幸田露伴が明治四十一年から大正十三年まで蝸牛庵と名付けて親しんだ住居の跡です。露伴は明治二十六年冬この寺島町かいわいに来住しそれから約二十年最も力の溢れた時期をこの地にすごし数々の名作を書かれました。当時の露伴は門弟を相手に剣道、弓道、相撲、などしてよく遊んだそうです。

このゆかりの地を永久に記念したいと露伴を思慕される地主の菅谷辰夫氏が区に寄贈されました。寺島の土地を愛し親しんだ幸田露伴の旧跡を子供たちの楽しい遊び場としていつまでも保存しようとして児童遊園を造ったものです。

昭和二十九年三月建立 墨田区

琇堂書

碑陰

文字なし



幸田露伴旧居址記念碑

所在地 東京都墨田区東向島 1-8 露伴児童遊園内

露 伴 児 童 遊 園 の こ と

ここは文豪幸田露伴が明治四十一年から大正十三年まで蝸牛庵と名付けて親しんだ住居の跡です 露伴は明治二十六年冬この寺島町かいわいに来住しそれから約三十年最も力の溢れた時期をこの地ですごし数々の名作を書かれました 当時の露伴は門弟を相手に県道、弓道、相撲、などしてよく遊んだそうです

このゆかりの地を永久に記念したいと露伴を思慕される地主の菅谷辰夫氏が 区に寄贈されました 寺島の土地を愛し親しんだ幸田露伴の旧跡を子供たちの楽しい遊び場として いつまでも保存しようと児童遊園を造ったものです

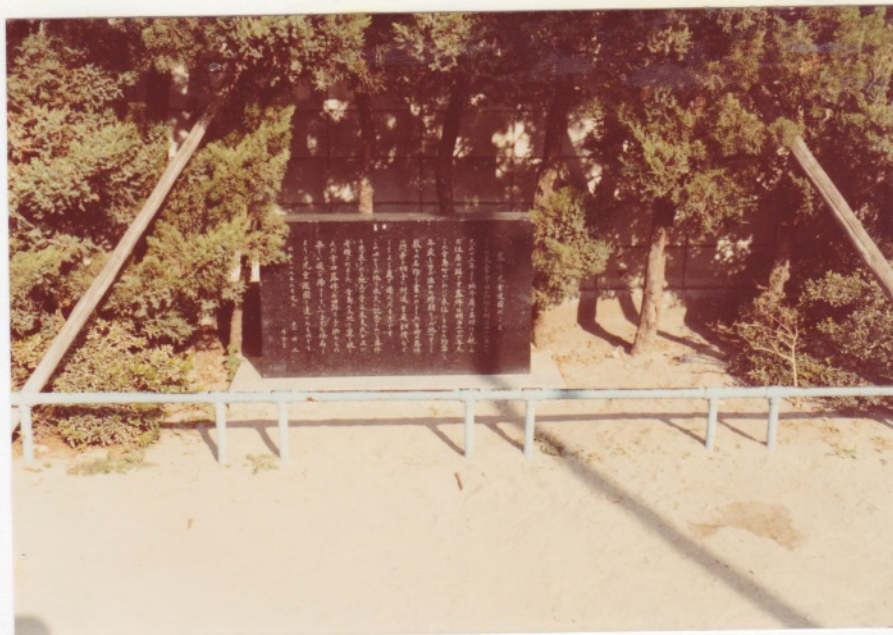
昭和三十九年三月建立

墨 田 区

琇 堂 書

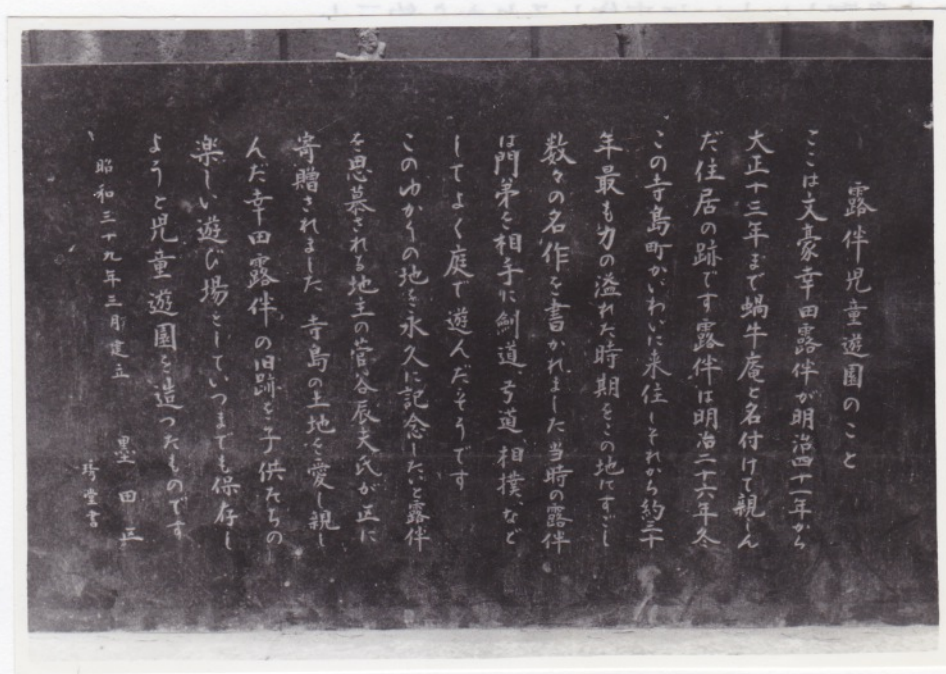
碑陰

文字なし



田幸

二大
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇



記念碑



記念碑

幸田露伴文学碑

所在地 東京都墨田区東向島一丁目 露伴児童遊園地内

幸田露伴文学碑

世おのづから^す數といふもの有りや。
有りといへば有るが如く、
無しと為せば無きにも似たり。
洪水^{うすずい}天^{てん}に滔^{ほう}るも、禹^うの功^{こう}これを治め、
大旱^{たいかん}地^ちを焦^{あせ}せども、湯^{とう}の徳^{とく}これを濟^{すく}へば、
數有るが如くにして、而も數無きが如し。

「運命」より

碑陰

文豪幸田露伴は、長くこの地に居住され、幾多の名作を残された。ここに向島時代の名作「運命」の冒頭の一節を刻み、その偉業を偲ぶものである。

平成二年十二月吉日

墨田区



台石裏面

施工業者の社名 所番地 電話番号略

幸田露伴文学碑

所在地 東京都墨田区東向島 1-8 露伴児童遊園内

幸田露伴文学碑

世おのづから^{すう}數といふもの有りや。
有りといへば有るが如く、
無しと為せば無きにも似たり。
^{こう}洪水^{すい}天^{てん}に^{はびこ}滔るも、^う禹の^{こう}功これを治め、
^{たい}大^{かん}旱地を^{こが}焦せども、^{とう}湯の^{すく}徳これを濟へば、
數有るが如くにして、而も數無きが如し。

「運命」より

碑陰

文豪幸田露伴は、長くこの地に居住され、幾多の名作を残された。

ここに向島時代の名作「運命」の冒頭の一節を刻み、その偉業を偲ぶものである。

平成二年十二月吉日

墨 田 区

台石裏面（横書き）

施工業者の社名 所番地 電話番号(略)



幸田露伴詩碑

所在地 東京都墨田区東向島三丁目 墨田川高校校庭

校歌

幸田露伴作

情を花と いろはしく

こころを 富士と高くして

春秋すこし 逝く川の

不断の努力 学ばなむ

碑陰

贈昭和三十八年度卒業生一同



幸田露伴詩碑

所在地 東京都墨田区東向島 3-34 隅田川高校 校庭

校 歌

幸田露伴作

情を花と うるはしく
こゝろを 富士と高くして
春秋すごし 逝く川の
不断の努力 学ばなむ

碑陰

贈昭和三十一年度卒業生一同



同一主業卒更平八十三研印額



幸田露伴妻幾美子墓誌碑

所在地 東京都大田区池上二丁目 本門寺墓地 幸田家墓域

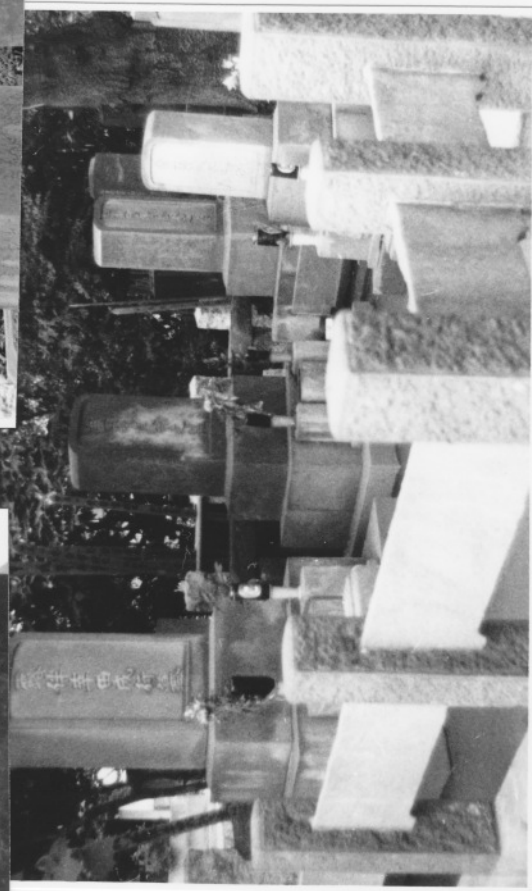
幸田幾美子之墓

裏面

幾美子山室氏東京人明治甲午歸於我
事舅姑得其欽恭儉善治家使我得專心
於詩書若實十有七年矣嘗謂曰君永守
厥窟妾克甘糟糠山貞如是舉一男二女
庚戌四月八日歿享年三十七

明治壬子四月八日 幸田成行誌

壬子年 庚戌年 壬子年



幸田露伴妻幾美子墓誌碑

所在地 東京都大田区池上 1-1-1 本門寺墓地 幸田家墓域

幸 田 幾 美 子 之 墓

裏面

幾美子山室氏東京人明治甲午歸於我
事舅姑得其歡恭儉善治家使我得專心
於詩書者實十有七年矣嘗謂曰君永守
巖窟妾克甘糟糠山貞如是舉一男二女
庚戌四月八日歿享年三十七

明治壬子四月八日 幸田成行誌

(注)甲午=27年 庚戌=43年 壬子=45年



幸田露伴一族墓誌碑

所在地 東京都大田区池上 1-1-1 本門寺墓地 幸田家墓域

露伴幸田成行墓

右側面

昭和廿二年七月卅日歿 享年八十一

幸田 文 拝建

幸田歌子之墓

裏面

歌子吾長女也明治辛丑生壬

子五月二十一日死慧而孝命

則天哀哉

大正二年五月 幸田成行記

(注) 辛丑=34年 壬子=45年

幸田成豊之墓

裏面

大正十五年十一月六日歿

露伴
(成行)

幾美子
↓

成豊
↓

歌子
↓



主主其幸節陳出支與吾午鄉
命幸而慧更日一十二月正午
熱賣天頂
廣行如田幸 凡正平二五火
幸 20=午主 幸 18=丑幸 (持)



本
附
寺
の
五
重
塔
↓

幸田如豊文墓

幸田延子記念碑

所在地 東京都大田区池上二丁目 本門寺墓地 幸田家墓域

明治天皇御製

幸田延謹作曲

碑陰

文字なし

あさみとりすゐ

後方の堀の副碑

わたりたるおほそらの

幸田延先生

ひろきをおのか

明治三年三月九日生

昭和二年六月十四日歿

こゝろともかな

日本における洋楽の先
駆者として其普及に
盡されし先生の業績
を偲びて茲に碑を建つ

幸田延

昭和二年六月十四日

審聲會々員一同

外 有志一同

天

線

設計谷口吉郎

五



幸田延子記念碑

所在地 東京都大田区池上 1-1-1 本門寺墓地 幸田家墓域

明治天皇御製

幸田延謹作曲

あさみとり すみ

わたりたる おほそらの

碑陰

ひろきを おのか

文字なし

こゝろともかな

安藤こう謹書

譜

天

線

五

後方の塀の副碑（縦書き）

幸 田 延 先 生

明治 三 年三月十九日生

昭和二十一年六月十四日歿

日本における洋楽の先
駆者として其普及に
盡されし先生の業績
を偲びて茲に碑を建つ

昭和三十一年六月十四日

審聲會々員一同

外 有志一同

設計谷口吉郎



幸田露伴歌碑

所在地 長野県小諸市 チェリーパークライン (車坂峠の道路傍)

露伴

左側面

車坂峠まで四・七軒

こぼりなす

清水

あふれて

火の

もゆる山の

ふところ

夏なかり

けり



幸田露伴歌碑

所在地 長野県小諸市 チェリーパークライン(車坂峠への道)路傍

露 伴

こほりなす

清 水

あふれて

火 の

もゆる山の

ふところ

夏 なかり

けり

左側面

車坂峠まで四・七軒



幸田文旧宅 ← (伝通院近く)

河野繁子歌碑

所在地 大阪府岸和田市 岸和田城址二の丸公園 心技館前

めぐりつゝ、

登り来りし

高との、俯仰の

視野に花

あふれたり

繁子

碑陰

昭和五十五年四月

夢殿短歌会建之

松琴

かく

略歴

河野繁子 本名 志げ 明治三十七年四月二十三日 和歌山市に生まれる 県立有田高女卒業 平成五年十月二十四日歿す 享年八十九歳 墓は和歌山市吹上五、四、二、五 延寿院墓地にある



河野繁子歌碑

所在地 大阪府岸和田市 岸和田城址 二の丸公園 心技館前

めぐりつゝ

登り来りし

高とのゝ俯仰の

視野に花

あふれたり

繁子

碑陰

昭和五十五年四月

夢殿短歌会建之

松琴

かく

略歴

河野繁子 本名 志げ 明治 37 年 4 月 22 日 和歌山市に生れる 県立有田高女
卒業 平成 5 年 10 月 24 日歿す 享年 89 歳 墓は和歌山市吹上 5-4-25 延寿院
墓地にある



山岸和田城天主閣
←



岸和田城（三枚岩）



河野齡藏歌碑

所在地 長野県長野市大峯山 歌ヶ丘

わか子

よふ鳩(こ)の

雷鳥の

碑陰

文字なし

なく音は

レリーフ

(注) 鳩は雷鳥の意

かそか
にて

朝霧

ふかし

白馬の
峰

圓伊題 雲峰

略歴

河野齡藏 慶応元年二月八日 長野県東筑摩郡島内村大飼新田に生まれる 長野師範卒業 昭和十四年四月三日歿す 享年七十四歳



河野 齡藏 歌 碑

所在地 長野県長野市 大峯山 歌ヶ丘

わか子

よふ鵜の

なく音は

かそか

にて

朝霧

ふかし

白馬の

峰

画併題 雲 峰

雷鳥の

レリーフ

碑陰

文字なし

(注)鵜は雷鳥の意

略歴

河野齡藏 慶応元年2月8日 長野県東筑摩郡島内村犬飼新田に生れる 長野
師範を卒業 昭和14年4月3日歿す 享年74歳

頤齡碑

相馬而食
預碑↓



向陵塚の碑

所在地 神奈川県鎌倉市山の内三宅 東慶寺墓地内 突当り

向陵塚

柏の校章

碑陰

魂ヨ歸リ來レ東西ニ南北ニ離羣索居セル先進
我等ノ英魂ヨ天翔ケリ來テ俱ニ一處ニ會セヨ
我々ハ欣躍シテ相迎ヘ嚶鳴求友ノ情ヲ再ヒシ
儼ノ下相擁シテ豪歌ヲ唱和シ往事ヲ語ラン
トス憶フ昔向陵ニ學フヤ四綱領ヲ體シ師生相
信シ相和シ時雨ノ化スルカ如ク自ラ業ヲ成シ
寮友相睦ミ相戒ノ砥礪ス能ク遺緒ヲ紹キキ
生キテハ英トナリ一世ニ標樹シ死シテハ魂ト
ナリ九泉ニ映徹ス是レ所謂向陵精神ノ然ラシ
ムル所ニシテ彼ノ向陵碑ニ我カ石磨クヘク我
カ志奪フヘカラスト風雪百變スルモ不滅ナル
ヲ直筆セル所以ナリ今日同學ノ會合百有餘相
聚マレハ寮歌ヲ高唱シテ思慕愛惜ノ情ヲ新タ
ニス蓋詞ハ情ニ生シ情ハ詞ニ生スルヲ以テニ
非スヤ我等彼ヲ想ヒ此ヲ觀膏謀リテ向陵塚ヲ
營ミ先進同學ノ英魂ヲ招キテ會同ヲ冀ヒ地ヲ
北鎌倉松岡山麓東慶寺畔ニトシ同志ニ檄シテ
贊同ヲ乞ヒ茲ニ落成ノ典ヲ舉ノルヲ得タリ鳴
呼重嶺翠竹苞松茂千古英魂ノ鎮マル所春趣
秋詣通夢交魂以テ永ク愛敬ノ慄ヲ致サン

昭和五十二年五月吉日

向陵塚建立世話人代表

亀井 高孝 明治卅九年文卒

竹内 潔 大正二一年理卒

竹田 腹 大正二二年文卒

撰文揮書

題字 菅 虎雄先生遺墨所収

副碑

向陵塚由来

我等がここに向陵塚を建立したのはその昔
向陵の地に寝食を共にして学を治め友情を温
めた第一高等学校同窓生の魂の落着き所とし
て永く後世に残そうとするものであります
第一高等学校(一高)は明治八年東京英語
学校として創立され同十年東京大学予備門と
改称更に同十九年第一高等中学校となり同二
十七年第一高等学校としてその輝しい歴史を
繰リ広げ戦後昭和二十五年学制改革により終
焉となりました
この間明治二十二年本郷向が丘(故に我等は
向陵と呼ぶ)の地に校舎の外に寄宿寮を設け全
寮制の下に切磋琢磨し幾多の人材を世に送り
ました
柏葉と橄欖をあしらった校章二本の白線の
帽子は時の世に有名で毎春行われた記念祭や
記念祭毎に生徒達によつて作られた寮歌は満
天天下を風靡しました寮歌のうちでも「嗚呼玉
杯に花うけて」春爛漫の花の色「アムール川の流
血や」等現代でもよく唱われている歌が多々あ
ります
今はなき第一高等学校の同窓生がありし日
の良き寮生活に育まれた智慧と正義(まこと)と
友情の絆をいとおしみ永く我等の魂をともし
も止めんとした所以はかくの如くであります

昭和五十二年五月

向陵塚建立世話人会



向陵塚の碑

所在地 神奈川県鎌倉市山ノ内 1367 東慶寺墓地内 最上段突当り

向 陵 塚 (縦書き)

台石には柏の校章がある

碑陰

魂ヨ歸リ来レ東西ニ南北ニ離羣索居セル先進
同學ノ英魂ヨ天翔ケリ来テ俱ニ一處ニ會セヨ
我等ハ欣躍シテ相迎ヘ嚶鳴求友ノ情ヲ再ヒシ
橄欖ノ下相擁シテ寮歌ヲ唱和シ往事ヲ語ラン
トス憶フ昔向陵ニ學フヤ四綱領ヲ體シ師生相
信シ相和シ時雨ノ化スルカ如ク自ラ業ヲ成シ
寮友相睦ミ相戒ノ砥礪怠ラス能ク遺緒ヲ紹キ
生キテハ英トナリ一世ニ標樹シ死シテハ魂ト
ナリ九泉ニ映徹ス是レ所謂向陵精神ノ然ラシ
ムル所ニシテ彼ノ向陵碑ニ我カ石磨クヘク我
カ志奪フヘカラスト風雪百變スルモ不滅ナル
ヲ直筆セル所以ナリ今日同學ノ會合百有餘相
聚マレハ寮歌ヲ高唱シテ思慕愛惜ノ情ヲ新タ
ニス蓋詞ハ情ニ生シ情ハ詞ニ生スルヲ以テニ
非スヤ我等彼ヲ想ヒ此ヲ觀胥謀リテ向陵塚ヲ
營ミ先進同學ノ英魂ヲ招キテ會同ヲ冀ヒ地ヲ
北鎌倉松岡山麓東慶寺畔ニトシ同志ニ檄シテ
賛同ヲ乞ヒ茲ニ落成ノ典ヲ舉クルヲ得タリ鳴
呼重嶺積翠竹苞松茂千古英魂ノ鎮マル所春趨
秋詣通夢交魂以テ永ク愛敬ノ情ヲ致サン

昭和五十二季五月吉日

向陵塚建立世話人代表

亀井高孝 明治卅九年文卒

竹内 潔 大正 二 年理卒

竹内 腹 大正 三 年文卒

撰文拝書

題字 菅 虎雄先生遺墨所収

(副碑は次の頁に続く)



副碑

向陵塚由来

我等がここに向陵塚を建立したのはその昔
向陵の地に寝食を共にして学を治め友情を温
めた第一高等学校同窓生の魂の落着き所とし
て永く後世に残そうとするものであります

第一高等学校(通称「一高」)は明治八年東京英語
学校として創立され同十年東京大学予備門と
改称更に同十九年第一高等中学校となり同二
十七年第一高等学校としてその輝しい歴史を
繰り広げ戦後昭和二十五年学制改革により終
焉となりました

この間明治二十三年本校向が丘(故に我等は
向陵と呼ぶ)の地に校舎の外に寄宿寮を設け全
寮制の下に切磋琢磨し幾多の人材を世に送り
ました

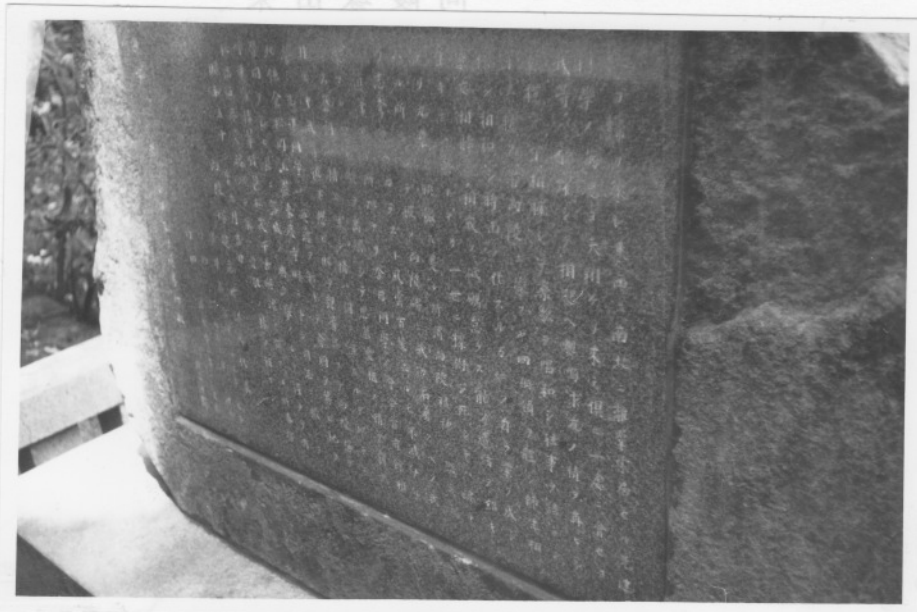
柏葉と橄欖をあしらった校章二本の白線の
帽子は時の世に有名で毎春行われた記念祭や
記念祭毎に生徒達によって作られた寮歌は満
天下を風靡しました 寮歌のうちでも「嗚呼玉
杯に花うけて」「春爛漫の花の色」「アール川の流
血」等現代でもよく唱われている歌が多々あ
ります

今はなき第一高等学校の同窓生がありし日
の良き寮生活に育まれた智慧と正義(まこと)と
友情の絆をいとおしみ永く我等の魂をともし
も止めんとした所以はかくの如くであります

昭和五十二年五月

向陵塚建立世話人会

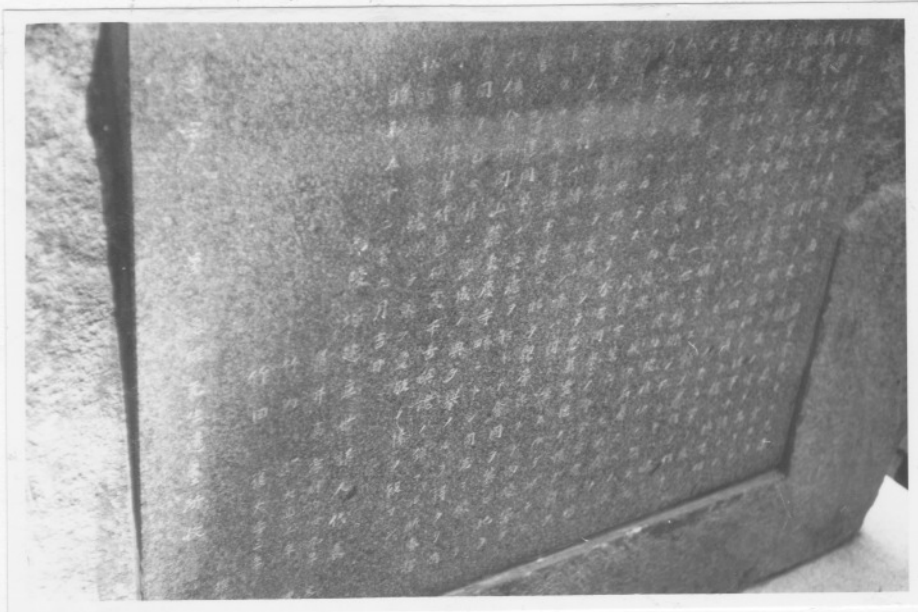
来由宛頼向



いざいけりて林入のてきりぬれぬけりていけりて

大い

の難白の本二章対へる、よき野無く難前



古賀政男詩曲碑

所在地 福岡県大川市酒見 大川公園内

影を慕いて

古賀政男詩曲

碑陰

昭和四十二年十月吉日建立

まぼろしの

影を慕いて雨に日に

月にやるせぬ我が想い

つゝめば燃ゆる胸の火に

身は焦れつゝ、忍び泣く

副碑

古賀政男先生曲碑建立委員会

近藤頼三

山浦茂行

貞包武雄

中村 泰郎

副碑裏面

文字なし

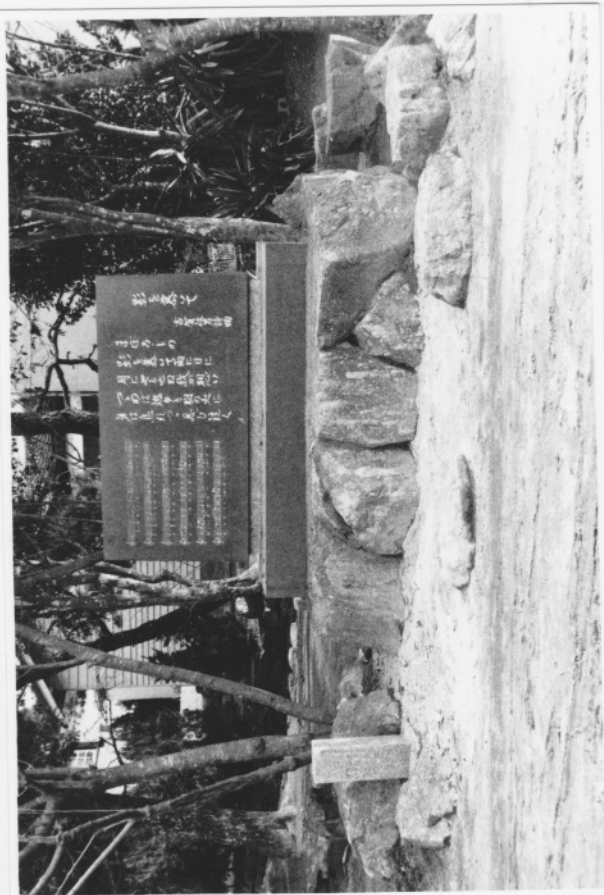
譜

線

五

略歴

古賀政男 明治三十七年十二月六日 福岡県三潴郡田口村に生まれる 明治大学卒業 昭和五十二年七月二十五日歿す 享年七十三歳 法名 大誓院釋正樂 墓は東京都杉並区永福 和田堀廟所墓地にある



古賀政男詩曲碑

所在地 福岡県大川市酒見 大川公園内

影を慕いて

古賀政男詩曲

まぼろしの

影を慕いて雨の日に

月にやるせぬ我が想い

つゝめば燃ゆる胸の火に

身は焦れつゝ忍び泣く

五線譜

碑陰

昭和四十三年十月吉日建立

副碑

古賀政男先生曲碑建立発起人代表

近藤頼三

山浦茂行

貞包武雄

中村太次郎

副碑裏面

文字なし

略歴

古賀政男 明治37年11月18日 福岡県三潞郡田口村に生れる 明治大学卒業
昭和53年7月25日歿す 享年73歳 法名 大響院釋正樂 墓は東京都杉並区
永福 和田堀廟所墓地にある



影を慕って雨に日に



(福岡県大川市大字三九八四番地)



赤い実

古賀政男
88年
11月



小酒井不木句碑

所在地 愛知県海部郡蟹江町鹿島 鹿島神社文学苑内

いつとんで来たか

不木

机に黄の 一葉

小酒井不木句碑陰

小酒井不木 名は光治 不木は号なり 明治二十三年蟹江町に生れ当地小学校を卒業後愛知県立第一中学校 京都第三高等学校を経て帝大医科へ入学 大正三年卒大学院に移る 全六年東北大学医学部助教授 辞命 同時に衛生学研究の為海外留学を命ぜらる 全八年ロンドンにて発病 全九年小康を得て帰朝 神守村にて静養文筆生活始まる 全十年博士号を得たれど遂に東北大学の教壇に立つ事なく退職 全十二年名古屋市御番所町に移り専ら探偵小説の創作並に随筆を執筆発表 かねがね国推理小説の育成に貢献した 江戸川乱歩の処女作二銭銅貨は即ち不木の推薦に依るものである 昭和四年四月一日病革り逝去 享年四十八歳 一男一女あり 小酒井不木全集十七巻完成す われわれ枯華句会 不木の発起によるものにして 蛻々今日に至る この地に同人の句碑のあるのはその縁による

昭和四十五年春

撰文 弟子 岡戸武平

黒川巳喜建立

略歴

小酒井不木 本名 光次 明治二十三年十月八日 愛知県海部郡蟹江町に生まれる 東大医学部卒業 昭和四年四月一日歿す 享年三十八歳 墓は名古屋市天白区天白町 市営八事霊園にある



小 酒 井 不 木 句 碑

所在地 愛知県海部郡蟹江町鹿島 鹿島神社 文学苑内

いつとんで来たか 不木

机に黄の一葉

碑陰

小酒井不木 名は光治 不木は号なり 明治二十三年蟹江町に生れ当地小学校を卒業後愛知県立第一中学校 京都第三高等学校を経て帝大医科へ入学 大正三年卒大学院に移る 全六年東北大学医学部助教授拝命 同時に衛生学研究の為海外留学を命ぜらる 全八年ロンドンにて発病 全九年小康を得て帰朝 神守村にて静養文筆生活始まる 全十年博士号を得たれど遂に東北大学の教壇に立つ事なく退職 全十二年名古屋市御番所町に移り専ら探偵小説の創作並に随筆を執筆発表 わが国推理小説の育成に貢献した 江戸川乱歩の処女作「二銭銅貨」は即ち不木の推薦に依るものである 昭和四年四月一日病革り逝去 享年四十歳 一男一女あり 小酒井不木全集十七巻完成す われわれ枯華句会は 不木の発起によるものにして婉々今日に至る この地に同人の句碑のあるのはその由縁による

昭和四十五年春

撰文 弟子 岡戸武平

黒川巳喜建立

略歴

小酒井不木 本名 光次 明治 23 年 10 月 8 日 愛知県海部郡蟹江町に生まれる 東大医学部卒業 昭和 4 年 4 月 1 日歿す 享年 38 歳 墓は愛知県名古屋市天白区天白町 市営八事霊園 第四区にある

小戸共木向



立石の碑の半大井東の墓にハス得たもよびヤトコ 小戸共木向
 華園の並木園の碑小戸共の事り墓にハス得たもよびヤトコ 小戸共木向
 貴園の二ハス得たもよびヤトコ 小戸共木向
 十四平亭 去後日華園一日ハス得たもよびヤトコ 小戸共木向

